

目 次

I. 総会、理事会、政策委員会、部会関係

- 1) 平成20年度定時総会・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- 2) 平成20年度事業計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- 3) 理事会審議議題・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- 4) 政策委員会の開催・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
- 5) 宣伝部会、営業部会、製作＝渉外部会
総務、経理合同部会の開催・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

II. 主な事業活動の報告

- 1) 外国映画事業、映画関係法規等の調査、研究並びに資料の収集および
作成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
- 2) 優秀な外国映画の保存及び公開
東京国立近代美術館フィルムセンターへのフィルム寄贈・・・・ 10
「トーキョーシネマショー」の開催・・・・・・・・・・・・ 11
第47回「優秀外国映画輸入配給賞」の実施・・・・・・・・・・ 13
- 3) 国際協力に資する各種映画祭の開催協力・・・・・・・・・・ 18
- 4) 輸入外国映画の品質、興行成績及び事故による損傷、滅失等の評価、
鑑定又は証明・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
- 5) 輸入外国映画の国際取引に係る紛争解決の斡旋・・・・・・・・ 19
- 6) その他、本会の目的を達成するために必要な事業・・・・ 20

別添各種資料

GTF トーキョーシネマショー2008 スペシャルイベント関連資料

- 1) 「筑紫賞：ゴールデンタイトル・アワード」授賞式・・・・ 23
- 2) トークショー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
- 外画概況 国別・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
- 外画概況 会社別・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
- 作品目録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53

社団法人外国映画輸入配給協会事業報告

I. 総会、理事会、政策委員会、部会関係

1) 平成20年度定時総会

平成20年度定時総会が以下の通りおこなわれた。

開催日時： 平成20年6月13日午後1時

開催場所： 東京建設会館 7階会議室

平成19年度事業報告、決算報告ならびに平成20年度事業計画、収支予算は承認可決された。

理事の任期満了に伴い、理事椎名保、理事依田巽、理事松岡宏泰、理事風野健治、理事幸田順平の5氏の選任が承認可決され、理事平沼久典、理事黒田陽子の2氏の退任が承認可決された。

2) 平成20年度事業計画

平成20年度事業計画は以下の通り

社団法人外国映画輸入配給協会が、平成20年4月1日より同21年3月31日迄の間に行う予定の主要事業は下記の通りで、社団法人映画産業団体連合会傘下の我が国唯一の邦人系外国映画輸入配給業者の団体として、運営の基盤を一層着実に安定させると共に、社団法人日本映画製作者連盟、全国興行生活衛生同業組合連合会、モーション・ピクチャー・アソシエーション(MPA)、社団法人日本映像ソフト協会、日本国際映画著作権協会、外国映画通関連絡協議会等関連諸組織との提携を一層密接にし、文字通り洋画界を代表する唯一の公的機関としての権威付と内的充実を計るよう努力する。

1. 外国映画事業、映画関係法規等の調査、研究並びに資料の収集および作成 (定款第4条(1))

①

毎年3月に「外国映画作品目録」(前年4月から3月までに日本で配給された外国映画作品目録)、同じく7月、1月の2回「外画概況」(国別、会社別)を各々作成発行する他、必要に応じて随時資料等を発行し、日本に於ける外国映画の輸入、配給、興行に関する基礎的資料の整備に努力する。

同資料はホームページにて公開。昨年と同様にホームページ英語版の充実をはかり、海外からの要請に対応する。

2. 優秀な外国映画の保存及び公開（定款第4条（2））

①

会員各社が権利を有する各配給作品の期限切れの際に作品のプロデューサーから許可を得て、研究用資料として当該作品のプリント1本を東京国立近代美術館フィルムセンターに永久貸与する活動を広げていく。

②

「トーキョーシネマショー」の開催

昨年8月7日から8月12日に行った“GTFトーキョーシネマショー2007”に引き続き、本年度も“GTFトーキョーシネマショー2008”を開催する。

本年度はグレートウキョウフェスティバル2008（GTF2008）開催期間中に8月28日（木）から8月30日（土）の3日間、社団法人日本映画製作者連盟（映連）、全国興行生活衛生同業組合連合会（全興連）、モーション・ピクチャー・アソシエーション（MPA）、GTF実行委員会との共催企画として、東商ホールで開催を予定している。

アメリカ映画興行界が毎年3月に国内のみではなく世界の映画・興行関係の参加者を対象に開催している「SHOWEST」を参考に、経済産業省、財団法人日本映像国際振興協会と特定非営利活動法人映像産業振興機構の後援を得て、第21回東京国際映画祭の提携企画のひとつとして当協会会員及びMPA加盟洋画配給各社と映連会員各社が平成20年秋から平成21年夏に公開を予定している作品（邦・洋画）の宣伝担当による紹介、特報・予告篇の上映、試写会、チラシ、各社ラインアップを網羅した作品紹介パンフレットの配布等を通して各作品と会社のプレゼンテーションを行う他、一般映画ファン（無料にて招待）、興行者、各種メディア関係者を対象に映画に因むイベント、トークショー等を併せて実施する。

昨年7月から今年6月までに上映された邦画、洋画作品で最もすばらしいタイトルをつけた作品を表彰する「筑紫賞：ゴールデンタイトル・アワード」授賞式をトーキョーシネマショーのイベントの中で行う。

8月28日（木）初日にはホールと同階に「デジタル上映プロジェクター（3D機材を含む）」展示場をもうけ、5社のプロジェクター展示・説明会を開催し、劇場関係者をはじめとする関係者の要望に応じる。

2010年に第15回をむかえる為「トーキョーシネマショー15周年記念特別イベント」の準備を行う。

③

第47回「優秀外国映画輸入配給賞」の実施

本協会最大の年中行事として昭和37年度より実施しているが、第47回も、平成20年4月1日より平成21年3月31日迄の1カ年間に、作品的に優秀で、なおかつ新分野を開拓し、日本映画界の発展に大きく寄与すると認められた外国映画を我が国に輸入公開した配給会社を審査員12名が選考のうえ表彰する。当該会社に経済産業大臣から賞状および記念品を授与して頂く。授賞式は平成21年4月15日（水）を予定し、授賞式後に受賞会社提供作品の試写会を開催、応募者600名を無料にて招待予定。

3. 国際協力に資する各種映画祭の開催及び協力（定款第4条（3））

日本映画の輸出を円滑に行い、海外との良好な関係を築き国際協力に資する為、第21回「東京国際映画祭」、「フランス映画祭」をはじめとする我が国で開催される各種映画祭を成功裡に終了させるよう後援、運営等の協力をする。合わせて、各国の日本における映画振興政策・活動に協力する。
日本アカデミー賞の運営に協力する。

4. 輸入外国映画の品質、興行成績及び事故による損傷、滅失等の評価、鑑定又は証明（定款第4条（4））

「映画サービスデー」実施を始めとする全興連事業への協力

12月1日「映画の日」ならびに東京都興行生活衛生同業組合（都興連）が主催する毎月1回、年12回（「映画の日」を含める）実施される「映画サービスデー」に協力するとともに、都興連が作成する同日の興行成績対比などの資料を活用し、観客動員の増加に努めると同時に輸入外国映画の品質、興行成績、興行における事故等の最新の情報収集に努める。

当協会会員あるいは、関係諸団体より、上に掲げる評価、鑑定、証明の要請がある場合には、適宜対応する。

5. 輸入外国映画の国際取引に係る紛争解決の斡旋（定款第4条（5））

①

当協会会員各社は作品契約に際して諸般の事情の許す限り情報交換を行い、買付に当たっての重複を避けると共に、過当競争を防止し、日本における輸入配給事業の健全な発展を計るよう努力する。

②

映像産業の多様化とIT化に伴う、劇場用長編外国映画の著作権侵害に対する諸対策の件

日本の映画館内で上映中の邦画・洋画が盗撮され、その作品がウィニーあるいはP2P他のソフト使用によりオンライン上で無料交換され、あるいはDVDに製作のうへ繁華街等の路上で販売されている状況が深刻になってきた状況をうけ、外配協では知的財産保護委員会が中心となり、(社)日本映画製作者連盟(映連)、モーション・ピクチャー・アソシエーション(MPA)、全国興行生活衛生同業組合連合会(全興連)、(社)日本映像ソフト協会、日本国際映画著作権協会(JIMCA)等関係各方面と密接な連絡をとって映画盗撮防止、海賊版摘発、著作権確立をはじめとする各種の対策を協議、研究し、国際間の問題に対処できる基盤の整備に努めてきたが、引き続き本件への取組みを強化し日本の映画興行市場が海賊版流出により、海外映画製作者・配給者から、その健全性に疑念を抱かれないよう、盗撮防止と海賊版防止に努める。

平成19年8月30日に施行のはこびとなった「映画の盗撮の防止に関する法律」を守り、一般の理解を得る目的で「映画館に行こう！」実行委員会を核とし、JIMCA、映連、日本映像ソフト協会、全興連と協力して盗撮を防止するための措置を講ずるよう一層努める。

「知的財産保護」活動を継続して円滑に展開する為、本年度も資金の充実を計る。

6. 前各号に掲げるもののほか、本会の目的を達成するために必要な事業
(定款第4条(6))

①

「映画館に行こう！」キャンペーン事業への参加

映画人口の拡大を実現し、映画産業と日本経済の発展に資する事を目的に、(社)日本映画製作者連盟、全国興行生活衛生同業組合連合会、モーション・ピクチャー・アソシエーション(MPA)の映画業界3団体と協力して、「映画館に行こう！」キャンペーンの成功ならびに実行委員会の課題にむけて、協会及び各会員会社が積極的に参加し、その実績を検証する。

②

副音声付等特殊上映事業

「さまざまな人に映画を届ける」を目標に、視覚・聴覚に障害のある方々、あるいは、高齢者に配慮した環境の中で映画作品を上映する機会を設ける活動を続け、その為の資金の充実を計る。

③

年頭名刺交換会の開催

モーション・ピクチャー・アソシエーション(MPA)の協力を得て、日本の映画産業を支える配給、興行、製作関係者等600名余に参加いただき、

年頭にあたり外国映画輸入配給事業の健全な発達を図り我が国経済の発展と文化の向上に寄与することを目的として平成20年度も平成21年1月5日（月）に「年頭名刺交換会」を開催する。

④

2012年に協会創立50周年をむかえるにあたり、創立50周年記念事業企画委員会を中心となり記念事業企画を検討していく。

⑤

その他目的を達成する為に必要な事業に関し、各部会、各種専門委員に於いて積極的な研究を行う。

3) 理事会審議議題

○4月定例理事会（4月18日開催）

3月定例理事会議事録承認の件

3月中の事業報告承認の件

平成19年度決算の件

平成20年度予算の件

トーキョーシネマショーの件

株式会社ゴー・シネマの入会申請の件

「優秀外国映画輸入配給賞」の件

SKIP シティ国際Dシネマ映画祭2008後援名義使用申請の件

公益法人制度改革の概要の件

<配布資料>

東京都「映画サービスデー」主要館興行成績対比資料（4月1日実施）

第46回優秀外国映画輸入配給賞パンフレット

EUフィルムデイズ2008作品紹介チラシ

○6月定例理事会（6月13日開催）

4月定例理事会議事録承認の件

4月、5月中の事業報告承認の件

GTFトーキョーシネマショー2008の件

「映画館へ行こう！」新年度キャンペーンの件

「優秀外国映画輸入配給賞」の件

GTF「東京みつけ2008」後援名義使用申請の件

「あいち国際女性映画祭2008」後援名義使用申請の件

「第6回京都映画祭」後援名義使用申請の件

「川喜多かしこ生誕100周年」後援名義使用申請の件

<配布資料>

第47回優秀外国映画輸入配給賞審査員名簿

「ねんきん特別便」に関する協力依頼について（経済産業省）

夏季に省エネルギー対策について（経済産業省）

東京都「映画サービスデー」主要館興行成績対比資料（5月1日実施）

東京都「映画サービスデー」主要館興行成績対比資料（6月1日実施）

○7月定例理事会（7月18日開催）

6月定例理事会議事録承認の件

6月事業報告承認の件

GTFトーキョーシネマショー2008の件

株式会社プレノン・アッシュ退会届の件

第46回「優秀映画輸入配給賞」決算報告の件

クールアースデーについて

電力節電について

第21回東京国際映画祭後援名義使用申請の件

TIFFCOM2008後援名義使用申請の件

字幕製作協力依頼の件

日本映像倫理審査機構の件

バリアフリー映画について

生誕100年川喜多かしこ展および上映会について

株式会社デスペラード、日活株式会社と配給営業業務提携の件

新公益法人制度について

<配布資料>

東京都「映画サービスデー」主要館興行成績対比資料（7月1日実施）

○9月定例理事会（9月19日開催）

7月定例理事会議事録承認の件

7月、8月事業報告承認の件

GTFトーキョーシネマショー2008終了の件

「映画館盗撮防止」について

平成20年特定サービス産業実態調査の実施に伴う協力依頼について

第15回大阪ヨーロッパ映画祭後援名義使用申請の件

さっぽろ映画祭2008後援名義使用申請の件

第13回神戸100年映画祭後援名義使用申請の件

東京都「映画サービスデー」主要館興行成績対比資料（8月1日実施）

東京都「映画サービスデー」主要館興行成績対比資料（9月1日実施）

○10月定例理事会（10月17日開催）

映倫審査規定改定の件

9月定例理事会議事録承認の件

9月事業報告書承認の件

「映画館盗撮防止」について

GTFトーキョーシネマショー2008仮決算の件

日本アカデミー賞について

第53回「映画の日」行事執行運営協力費支出について

<配布資料>

東京都「映画サービスデー」主要館興行成績対比資料（10月1日実施）

第21回東京国際映画祭上映スケジュール

第13回神戸100年映画祭チラシ

大阪ヨーロッパ映画祭概要

○11月定例理事会（11月21日開催）

10月定例理事会議事録承認の件

10月事業報告書承認の件

GTFトーキョーシネマショーの件

「映画館盗撮防止」について

平成21年頭名刺交換会の件

映画ジャーナリスト宣伝部合同年賀の会

第53回映画の日特別功労大章・功労章について

大阪アジア映画祭後援名義使用申請の件

<配布資料>

東京都「映画サービスデー」主要館興行成績対比資料（11月1日実施）

○1月定例理事会（1月16日開催）

11月定例理事会議事録承認の件

11月、12月事業報告承認の件

2009年年頭名刺交換会終了の件

トーキョーシネマショーの件

「映画館盗撮防止」について

フランス映画祭2009後援名義使用申請の件

JAPAN国際コンテンツフェスティバル実行委員会終了報告の件

<配布資料>

平成20年外画概況

「レジャー白書」映画データ分析

東京都「映画サービスデー」主要館興行成績対比資料（12月1日実施）
東京都「映画サービスデー」主要館興行成績対比資料（1月1日実施）
日本アカデミー賞協会2009優秀賞・新人俳優賞受賞者一覧
第1回映団連セミナーチラシ

○2月定例理事会（2月20日開催）

1月定例理事会議事録承認の件

1月事業報告書承認の件

年頭名刺交換会の件

第47回優秀外国映画輸入配給賞の件

トーキョーシネマショーの件

沖縄国際映画祭2009後援名義使用申請の件

第21回東京国際映画祭事業終了報告の件

<配布資料>

2008年全国映画概況（(社)日本映画製作者連盟）

緊急保証の特定業種指定について（経済産業省）

「情報メディア白書2009」から「映画」の項抜粋

東京都「映画サービスデー」主要館興行成績対比資料（2月1日実施）

○3月定例理事会（3月27日開催）

2月定例理事会議事録承認の件

2月事業報告書承認の件

平成20年度仮決算の件

平成21年度事業計画の件

平成21年度仮予算の件

第47回優秀外国映画輸入配給賞の件

第2回したまちコメディ映画祭 in 台東後援名義使用申請の件

SKIPシティ国際Dシネマ映画祭2009後援名義使用申請の件

京都国立近代美術館+フィルムセンター共催フィルムプロジェクト

映画上映時間データベース化システムについて

<配布資料>

東京都「映画サービスデー」主要館興行成績対比資料（3月1日実施）

「週刊ダイヤモンド2009/03/28」から「激変！映画ビジネス」の項抜粋

- 4) 平成20年度に「政策委員会」は第118回から第126回までの9回開催され定款第20条第3項に従い、理事会の委任を受けて平成20年度の事業計画を実現し、協会運営を強力的に推進するための審議・検討を行った。

5) 理事会の承認のもとに以下の部会に於いて、事業計画推進・協会運営のための一般会議が行われた。

○宣伝部会

4回(9月26日、11月25日、1月27日、3月31日)

○営業部会

4回(9月30日、11月26日、1月26日、3月30日)

(5月22日臨時部会、2月25日懇親会)

○製作=渉外部会

4回(9月5日、11月6日、1月9日、3月6日)

○総務、経理合同部会

3回(9月29日、11月27日、3月25日)

(5月27日懇親会、1月9日新年懇親会)

II. 主な事業活動の報告

1) 外国映画事業、映画関係法規等の調査、研究並びに資料の収集および作成
平成20年度外国映画作品目録を平成20年1月に発行。続いて2月と3月に補足資料を発行して本資料を完成。平成20年度外画概況一国別、会社別一を7月と1月に発行。作品目録ならびに外画概況は別添。

なお、当協会ホームページを通して各種資料を提供しているが、平成20年度に当協会資料についての外部からの問い合わせは37件(大使館関係2件、メディア関係16件、法人8件、研究所1件、個人10件)であった。

2) 優秀な外国映画の保存及び公開

1. 東京国立近代美術館フィルムセンターへのフィルム寄贈

当協会会員会社から東京国立近代美術館フィルムセンターに永久貸与された作品は0本であった。会員各社の作品契約の諸条件の中で、海外契約相手のプロデューサーからの賛同を得て、日本(東京国立近代美術館フィルムセンター)にプリントを残す運動は、地道な活動ではあるが、重要な仕事であると認識して、各社が努力している。

2. 「トーキョーシネマショー」の開催

13回目を迎えた「トーキョーシネマショー」は「GTFトーキョーシネマショー2008」として以下の通り開催された。

会場：東商ホール

会期：8月28日（木）～8月30日（土）

主催：社団法人外国映画輸入配給協会

共催：モーション・ピクチャー・アソシエーション（MPA）

社団法人日本映画製作者連盟

全国興行生活衛生同業組合連合会

GTFグレートウキョウフェスティバル実行委員会

後援：経済産業省

財団法人日本映像国際振興協会

特定非営利活動法人映像産業振興機構

プログラム

○2008年秋～2009年 ラインアップ・プレゼンテーション

8月28日（木）

PART1 10時30分～12時00分

PART2 13時30分～15時10分

ナビゲーター：襟川 クロ（映画パーソナリティ）

映画パーソナリティ襟川クロ氏の司会で、外配協、MPA、映連加盟配給各社30社の宣伝担当者が、2008年秋以降に公開予定の新作映画ラインアップのプレゼンを行い会場は盛り上がった。

昼食時には、ラインアップ・プレゼンテーションに出席の興行、配給他関係者との懇親会が行われた。

○スペシャルイベント

8月28日（木）16時00分～17時30分

i. 「築紫賞：ゴールデンタイトル・アワード」授賞式

—映画をより多くの人に、日本語をより豊かに—

ジャーナリスト筑紫哲也氏が、2007年7月から2008年6月までの1年間に公開された映画を対象に、「最も素晴らしいタイトル」をつけた作品を表彰した。

ii. シネマトークショー

「筑紫哲也×木村大作監督 シネマトークショー」

－映画『劔岳 点の記』に見る「日本の姿」－

ゲスト：木村大作（映画監督） ホスト：襟川クロ

※「筑紫賞：ゴールデンタイトル・アワード」ならびにトークショー内容は別添

○試写会

8月29日（金）～8月30日（土）

8月29日、30日で外配協・MPA・映連会員、加盟会社により上映された新作作品は7本であった。

試写会作品出品内訳

外配協	4社	4本
MPA	2社	2本
映連	3社（うち2社は外配協からエントリー）	1本
合計		7本

各試写会作品名と試写会ならびにスペシャルイベント・予告篇入場者数

日付	作品名	一般 応募者数	入場者数
8/28(木)	ラインアップ・プレゼンテーション	279	508
	筑紫イベント	537	382
8/29(金)	ハンサム★スーツ	1,642	479
	おくりびと	1,118	394
	ゲット スマート	2,143	535
8/30(土)	アルビン／歌うシマリス3兄弟	791	490
	次郎長三国志	1,433	515
	パコと魔法の絵本	1,137	588
	デス・レース	1,867	473
合計		10,947	4,364

「GTFトーキョーシネマショー2008」パンフレットには、外配協、MPA、映連会員各社の2008年秋以降のラインアップ作品を可能なかぎり揃え、カラーで掲載し、資料としての価値を高めるよう配慮した。パンフレットは来場者に無料で配布され、秋以降に公開を待つ映画作品の紹介が、映画観客増加に繋がるよう努めた。

3. 第47回「優秀外国映画輸入配給賞」の実施

社団法人外国映画輸入配給協会が昭和37年度（1962年）から通商産業省（現経済産業省）の後援を得て制定した「優秀外国映画輸入配給賞」も平成20年度で47回を迎えた。第47回同賞は平成20年4月1日から平成21年3月31日迄の1年間に作品的に優秀で、なおかつ新分野を開拓し、日本映画界の発展に大きく寄与すると認められた外国映画を我が国に輸入公開した配給会社を表彰するため、12名（別項表示）の審査員により審査がおこなわれ、各賞が決定した。

概要は以下の通り

審査委員・運営委員合同会議は、6月4日（水）に開催され、第47回「優秀外国映画輸入配給賞」の実施要項が承認された後、第47回の審査員が紹介され、審査委員長に品田雄吉氏、副委員長に秋山登氏の就任が決定した。

審査員： 秋山 登、明智 恵子、宇井 寿之、大高 宏雄、岡 政人、
勝田 友巳、佐藤 雅昭、品田 雄吉、土屋 好生、藤井 真也、
藤原 作弥、村山 恒夫 (五十音字)

主 催： 社団法人外国映画輸入配給協会

後 援： 経済産業省

審査報告書

第1回審査会

第1回審査会は2月4日（水）午後12時より、日本映画製作者連盟会議室にて審査員10名出席のうえ開かれた。品田審査委員長から、審査の基本方針について説明が行われ、外国映画輸入配給協会が作成した2008年度「外国映画作品目録」を資料に、審査対象会社94社（当協会会員会社23社、MPA加盟会社5社、その他66社）を一社ずつ配給した全作品を検討しつつ審議を行った結果、最終審査会には以下の15社が選ばれた。

○エイベックス・エンタテインメント株式会社

「ハンティング・パーティ」「バグズ・ワールド」「花美男（イケメン）連続ボム事件」「言えない秘密」

○株式会社エプコット アルシネテラン・ディヴィジョン

「小さな赤い花」「マルタのやさしい刺繍」「PARIS パリ」「我が至上の愛 アストレとセラドン」

○株式会社ギャガ・コミュニケーションズ

「ラブマニノフ ある愛の調べ」「NEXT ネクスト」「ニンジャ・チアリーダー」
「マンデラの名もなき看守」「ランボー 最後の戦場」「ホットファズ 俺たちス
ーパーポリスマン!」「俺たちダークシューター」「コレラの時代の愛」「セック
ス・アンド・ザ・シティ」「センター・オブ・ジ・アース」「ブラインドネス」
「ミーアキャット」「チェ28歳の革命」「チェ39歳別れの手紙」

○株式会社スタイルジャム

「愛おしき隣人」「スウェーディッシュ・ラブ・ストーリー」「イントゥ・ザ・
ワイルド」

○東宝東和株式会社

「つぐない」「チャーリー・ウィルソンズ・ウォー」「奇跡のシンフォニー」
「ハムナプトラ3 呪われた皇帝の秘宝」「ウォンテッド」「レッドクリフ Part I」
「かけひきは、恋のはじまり」「デス・レース」「無ケーキの命中男 ノック
トアップ」「寝取られ男のラブ☆バカンス」「ヘルボーイ ゴールデン・アーミー」
「マンマ・ミーア！」

○株式会社東北新社

「アクロス・ザ・ユニバース」「僕らのミライへ逆回転」「ピアノチューナー・
オブ・アースクエイク」「ザ・ローリング・ストーンズ シャイン・ア・ライト」

○日活株式会社

「イースタン・プロミス」

○有限会社ビターズ・エンド

「TOKYO!」「そして、私たちは愛に帰る」「そして、私たちは愛に帰る」

○ムービーアイ・エンタテインメント株式会社

「フィクサー」「P2」「シューテム・アップ」「告発のとき」「デイ・オブ・
ザ・デッド」「落下の王国」「P. S. アイラヴユー」「アイズ」「1408号
室」「バンク・ジョブ」「アンダーカヴァー」「ヘルライド」「エレジー」

○ウォルト・ディズニー・ジャパン株式会社

ウォルト ディズニー スタジオ モーション ピクチャーズ ジャパン
「ゼア・ウィル・ビー・ブラッド」「ナルニア国物語 第2章カスピアン王子の
角笛」「ウォーリー」「ティンカー・ベル」

○株式会社ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント

「ジェイン・オースティンの読書会」「ブラックサイト」「噂のアゲメンに恋をした!」「ラスベガスをぶつつぶせ」「ブルー・ブルー・ブルー」「ミラクル7号」「近距離恋愛」「スターシップ・トゥルーパーズ3」「インクレディブル・ハルク」「ハンコック」「弾突 DANTOTSU」「アイアンマン」「その土曜日、7時58分」「ゾンビ・ストリップパーズ」「D-WARS ディー・ウォーズ」「アラビアのロレンス 完全版 ニュー・プリントバージョン」「007 慰めの報酬」

○パラマウント ジャパン株式会社

「クローバーフィールド HAKAISHA」「スパイダーウィックの謎」「インディ・ジョーンズ クリスタル・スカルの王国」「American Teen アメリカン・ティーン」「ジョージアの日記 ゆーうつでキラキラな毎日」「トロピック・サンダー 史上最低の作戦」「レボリューションナリー・ロード 燃え尽きるまで」

○ワーナー エンターテイメント ジャパン株式会社

ワーナー・ブラザーズ映画

「王妃の紋章」「紀元前1万年」「最高の人生の見つけ方」「フルズ・ゴールド カリブ海に沈んだ恋の宝石」「スピード・レーサー」「旅するジーンズと19歳の旅立ち」「ダークナイト」「スター・ウォーズ クローン・ウォーズ」「最後の初恋」「ゲット スマート」「ワールド・オブ・ライズ」「ラーメンガール」

○有限会社シネカノン

「この自由な世界で」「BOY A」「永遠のこどもたち」

○株式会社ヘキサゴン・ピクチャーズ

「アウェイ・フロム・ハー 君を想う」「メイド・イン・ジャマイカ」「12人の怒れる男」「ベティの小さな秘密」「ザ・フー：ライブ・アット・キルバーン」「ザ・フー：アメイジング・ジャーニー」「マルセイユの決着 (おとしまえ)」「ワンダーラスト」

第2回審査会（最終審査会）

第2回審査会は3月4日（水）午後12時より、日本映画製作者連盟会議室で行われた。第1回審査（2月4日）以降に公開された作品（追加会社7社）も含め、第1回審査会で選ばれた各配給会社作品の興行成績などを参考に審査が続けられた。品田委員長ほか11名による審査員により推薦理由が述べられ、徹底的に討論が行われたのち、以下の審査結果がだされた。

経済産業大臣賞

○東宝東和株式会社

「チェンジリング」「マンマ・ミーア!」「フロスト×ニクソン」
「レッドクリフ Part I」(エイベックス・エンタテインメント(株) 共同配給)「つぐない」

平成20年度においては、東宝東和がほぼ満場一致で経済産業大臣賞に推薦される形となった。「チェンジリング」のように興行的にも大健闘し作品評価も高い作品から「マンマ・ミーア!」「レッドクリフ Part I」の興行的大ヒット作品、そして「つぐない」のような文芸作品まで幅広く、その活躍ぶり はめざましく圧倒的であるとの評価であった。「レッドクリフ」でのエイベックスとの共同配給などをはじめ、それぞれの作品における大きな取り組み方が、インディペンデントの配給会社として象徴的な配給体制を作っているという意見もあり、本年度だけに限らずここ数年の実績と今後に対する期待も大きな推薦の背景となった。

特別賞

○ウォルト・ディズニー・ジャパン株式会社

ウォルト ディズニー スタジオ モーション ピクチャーズ ジャパン
「ウォーリー」「ナルニア国物語 第2章 カスピアン王子の角笛」
「ゼア・ウィル・ビー・ブラッド」「ダウト あるカトリック学校で」

「ウォーリー」の興行的、作品的な成功は、20年度後半の映画界を大きく牽引した。またアカデミー賞での評価もあり、ディズニーの価値をより高いものとした。さらに「ナルニア国物語 第2章カスピアン王子の角笛」の興行的な成功や「ゼア・ウィル・ビー・ブラッド」「ダウト あるカトリック学校で」の極めて高質な作品内容が審査委員の間で高く評価された。

○パラマウント ジャパン株式会社

パラマウント ピクチャーズ ジャパン
「インディ・ジョーンズ クリスタル・スカルの王国」
「レボリューショナリー・ロード 燃え尽きるまで」
「クローバーフィールド HAKAISHA」

「インディ・ジョーンズ クリスタル・スカルの王国」が、今年度洋画全体が苦戦している中であって興行収入ナンバーワンの成績を上げた実績が大きく評価された。また「レボリューショナリー・ロード 燃え尽きるまで」における良質な作品に加えて「クローバーフィールド HAKAISHA」などでの宣伝展開の

新機軸が注目に値するとの評価が、推薦の理由となった。

○株式会社東北新社

「ザ・ローリング・ストーンズ シャイン・ア・ライト」

「アクロス・ザ・ユニバース」「ピアノチューナー・オブ・アースクエイク」

異色な作品を積極的に輸入配給し続けている姿勢に高い評価が集まった。

「ザ・ローリング・ストーンズ シャイン・ア・ライト」をはじめ「アクロス・ザ・ユニバース」に加えて「ピアノチューナー・オブ・アースクエイク」は、それぞれユニークな内容で、異色であり、さまざまなジャンルの作品を配給している点が審査員による推薦理由であった。

奨励賞

○株式会社スタイルジャム

「イントゥ・ザ・ワイルド」「愛おしき隣人」「悲夢」

「イントゥ・ザ・ワイルド」に審査員多くの作品評価が集まった。会社として数年にわたり質の高いアート系の作品を積極的に輸入配給している姿勢も評価された。また「愛おしき隣人」「悲夢」の豊かな内容に審査員の議論が集中した。

○株式会社ギャガ・コミュニケーションズ = 日活株式会社

「チェ28歳の革命」／「チェ39歳別れの手紙」に対して

内容はあるがリスクの高い作品を勇気を持って輸入し、興行的にも成功させた功績は極めて大きく評価に値する。

またその作品を配給・宣伝し、話題を喚起して若者を含めた広い観客層に感動を与えた結果は称賛されるべきものであるとの意見が大勢を占めた。

授賞式は平成21年4月15日に開催され、一般応募者220組440人、関係者50人、合計490人を招待した。授賞式終了後は、東宝東和提供の「デュプリシティ スパイは、スパイに嘘をつく」の受賞記念特別試写会が行われた。

3) 国際協力に資する各種映画祭の開催協力

1. 次ページに記載の映画祭の後援・協力を行い、各映画祭が成功裡に開催されるよう協力した。
2. 第21回東京国際映画祭運営に協力をし、上映作品のフィルム通関、翻訳、字幕製作に協力した。トーキョーシネマショーは第21回東京国際映画祭提携企画となった。

平成20年度 外配協後援各種映画祭

映 画 祭	会 期	会 場
GTF東京みつけ♪ 2008	平成20年 7月 1日(火) ～ 9月30日(火)	東京都、神奈川県、 埼玉県、千葉県の各会場
SKIPシティ国際 Dシネマ映画祭 2008	平成20年 7月19日(土) ～ 7月27日(日)	SKIPシティ 彩の国ビジュアルプラザ 映像ホール、他
あいち国際女性映画祭 2008	平成20年 9月 3日(水) ～ 9月 7日(日)	ウィルあいち(愛知県 女性総合センター)
第6回京都映画祭	平成20年10月 8日(水) ～10月13日(月)	MOVIX京都、祇園会 館、京都造形芸術大学
第21回 東京国際映画祭	平成20年10月18日(土) ～10月26日(日)	渋谷 Bunkamura、 六本木ヒルズ、他
TIFFCOM2008～アジア・パ シフィック・エンタテイ ンメント・マーケット～	平成20年10月22日(水) ～10月24日(金)	六本木ヒルズ 森タワー 40階、49階
第13回 神戸100年映画祭	平成20年10月31日(金) ～11月15日(土)	ピフレホール(新長田)、 県民ホール、神戸アート ビレッジセンター
さっぽろ映画祭 2008	平成20年11月 1日(土) ～11月 3日(月)	STVホール、STV特 設ホール、他
第15回 大阪ヨーロッパ映画祭	平成20年11月 1日(土) ～11月30日(日)	リサイタルホール、大阪 厚生年金会館、他
したまちコメディ映画祭 in 台東	平成20年11月21日(金) ～11月24日(月)	台東区浅草地区・上野地 区
フランス映画祭2009	平成21年 3月12日(木) ～ 3月15日(日)	TOHO シネマズ六本木ヒル ズ

大阪アジア映画祭 2009	平成21年 3月13日(金) ～ 3月16日(月)	ABCホール(福島)
沖縄国際映画祭 2009	平成21年 3月19日(木) ～ 3月22日(日)	沖縄県北谷町「アメリカンビレッジ」、他

4) 輸入外国映画の品質、興行成績及び事故による損傷、滅失等の評価、鑑定又は証明

12月1日「映画の日」ならびに東京都興行生活衛生同業組合（都興連）が主催する毎月1回、年12回（「映画の日」を含める）実施される「映画サービスデー」に協力するとともに、都興連が作成する同日の興行成績対比などの資料を活用し、観客動員の増加に努めると同時に輸入外国映画の品質、興行成績、興行における事故等の最新の情報収集に努めた。

なお、平成20年度において輸入外国映画の事故による損傷、滅失等の評価、鑑定、又は証明の要請はなかった。

5) 輸入外国映画の国際取引に係る紛争解決の斡旋

1. 当協会会員各社は作品契約に際して諸般の事情の許す限り情報交換を行い、買付に当たっての重複を避けると共に、過当競争を防止し、日本における輸入配給事業の健全な発展を計るよう努力した。

2. 劇場用長編外国映画の映画盗撮行為、DVD及びブロードバンドをはじめとする映像産業の多様化に伴う諸対策に関する件

近年映画館内における映画盗撮行為及びインターネット上で劇場用長編映画ファイル共有・交換サイトに違法にアップロードされた作品を元にした大量の無断複製による海賊版DVDが売買されているなどの著作権侵害が頻発している。これらは、日本の映画製作を衰退させるばかりでなく、日本の輸入配給事業の健全な発展を阻むものであり、外国映画の国際取引に大きな影響を与えかねない問題を孕んでいることから、社団法人日本映画産業団体連合会、社団法人日本映画製作者連盟、モーション・ピクチャー・アソシエーション(MPA)、全国興行生活衛生同業組合連合会、社団法人日本映像ソフト協会、日本映画著作権協会他と緊密な連絡をとり諸対策を検討し「映画の盗撮の防止に関する法律」制定にむけての活発な活動をした結果、平成19年には政府関係皆様の大きな理解と協力を得て議員立法による法制化「映画の盗撮の防止に関する法律」が、同5月30日に公布され、8月30日から施

行された。その後映画業界団体は、映連、全興連、MPA、外配協で組織する「映画館に行こう！」実行委員会を中心として数々の映画盗撮防止措置を行っており、本年度も以下のような対策と活動を積極的に行った。

*全国全劇場（約3300スクリーン）で「盗撮防止キャンペーン」30秒CMを上映フィルムの冒頭にハードロックすることを継続実施。

*映画盗撮に関する情報提供の場として、違法対策室の活動継続および強化。フリーダイヤル電話番号とHPを周知徹底。

*「映画産業関係事業者向けガイド／映画盗撮防止法Q&A」ならびに、「映画盗撮防止マニュアル支配人用・従業員用」をリニューアル、劇場との綿密な連絡網を整備した。また関西・名古屋地区において新マニュアルのセミナーを開催、劇場への周知徹底を図った。2009年には東京での開催を予定している。

*国内P2Pネットワークの監視体制の整備と強化を行っている。

6) 前各号に掲げるもののほか、本会の目的を達成するために必要な事業

1. 「映画館に行こう！」実行委員会、キャンペーン事業への参加

映画人口の2億人拡大を実現し、映画産業と日本経済の発展に資する事を目的に、社団法人日本映画製作者連盟、全国興行生活衛生同業組合連合会、社団法人外国映画輸入配給協会、モーション・ピクチャー・アソシエーション(MPA)の映画業界4団体が平成16年に発足させた「映画館に行こう！」実行委員会の平成20年度事業に積極的に参加した。

平成20年度のキャンペーンテーマ「映画盗撮防止キャンペーン」については5)の2.に詳細に記載済。

同実行委員会が「映画大使」を委嘱してきた故・筑紫哲也氏の発案で、実行委員会が創設した「筑紫賞：ゴールデンタイトル・アワード」の4度目の受賞式が「GTFトーキョーシネマショー2008」の中で行われた。(同賞の内容は別添)

平成17年7月1日からは、若い世代の映画人口拡大を目標として、高校生に的を絞った「高校生友情プライス」キャンペーンは3年を目安に始めた同キャンペーンだったが、各劇場などから好評であることからもう一年延長して実施している。(平成21年6月末日まで)

外配協会各社は、キャンペーンチラシへの作品広告掲出、各社作品新聞広告にキャンペーンロゴを入れる等積極的な協力を行っている。

2. 副音声付等特殊上映事業

「さまざまな人に映画を届ける」を目標に、視覚・聴覚に障害のある方々、あるいは、高齢者に配慮した環境の中で映画作品を上映する機会を設ける活動として、「GTFトーキョーシネマショー2008」の試写会で、「アルビン/歌うシマリス3兄弟」の副音声上映を試みて、関係者の賛同を得た。

3. 宣伝デジタル委員会への参加

社団法人日本映画製作者連盟、社団法人外国映画輸入配給協会、モーション・ピクチャー・アソシエーション（MPA）の宣伝部が委員会を立上げ、平成20年度も「映画館に行こう！」キャンペーンの趣旨に沿ったデジタル部門のサポートを検討し、外配協ならびに会員各社のホームページ上で本年度の「映画盗撮防止」キャンペーン浸透に積極的に参加している。

4. 年頭名刺交換会の開催

モーション・ピクチャー・アソシエーション（MPA）の協力を得て、日本の映画産業を支える配給、興行、宣伝、製作、メディア関係者776名に参加いただき、年頭にあたり外国映画輸入配給事業の健全な発達を図り我が国経済の発展と文化の向上に寄与することを目的として平成21年は、平成20年に引き続き1月5日（月）に「年頭名刺交換会」を開催した。

5. 各種映画賞運営に協力

第32回「日本アカデミー賞」（運営委員として）、第63回「毎日映画コンクール」の運営（諮問委員として）に協力した。東京映画記者会主催の第51回「ブルーリボン賞」に後援者として協力した。

6. (社)映画産業団体連合会会員としての活動

社団法人映画産業団体連合会（映団連）の正会員として、当協会会長は理事として定時総会、定例理事会（9回）に出席し、事務局長はオブザーバーとして同席。映団連会員団体事務局長連絡会議に出席、映団連の会員として当協会の基盤の安定に努力した。映団連主催の第53回「映画の日」運営に協力した。

第53回「映画の日」永年勤続功労章受賞者（当協会推薦者）は以下の通り。

氏名	会社名	役職名
工藤 正一	株式会社ゴー・シネマ	営業部長
川島 清邦	グロービジョン株式会社	シニアプロデューサー

7. 外画宣伝部長会

当協会会員会社とモーション・ピクチャー・アソシエーション（MPA）加盟会社の合計27社の宣伝部長で構成される宣伝部長会（9回）を開き、直面する諸問題の検討、情報の交換等を行い、各社の宣伝業務が円滑、健全に遂行され、各社の輸入配給事業の活動が妨げられず、映画観客の増大に繋がる宣伝を各社が行える環境整備に努力をした。社団法人映画製作者連盟と協力して、2009年映画ジャーナリスト・宣伝部合同年賀の会を1月8日（木）に開催し、映画関係ジャーナリストとの交流を深めた。

8. 平成24年（2012年）にむかえる創立50周年記念事業に関しては、政策委員会の要請を受けて、「創立50周年記念事業企画委員会」を通して外配協各部会に通知され、審議された。

9. 平成22年（2010年）に第15回をむかえるトーキョーシネマショーに関して、政策委員会の要請を受けて協会各作業部会が、「トーキョーシネマショー」15周年記念事業の検討をはじめた。

以上

GTF トーキョーシネマショー 2008 スペシャルイベント

日 時：平成20年8月28日（木）午後16時00分～17時30分
場 所：東商ホールにて収録

- 1) 「筑紫賞：ゴールデンタイトル・アワード」授賞式
映画をより多くの人に、日本語をより豊かに

平成16年より始まった「映画館に行こう！」キャンペーンの“映画大使”でもあったジャーナリスト・故筑紫哲也氏の発案で、優れた日本語題名（タイトル）を顕彰することになったもの。
最初に賞を創設するにあたり、筑紫哲也氏より次のような文章が寄せられた。

「かつて映画の題名（タイトル）は、邦画、洋画を問わず流行語の“宝庫”でした。とくに輸入映画の場合、原題と引き較べて『うまい！』と宣伝部の腕の冴えと日本語の素養にうならされることがありました。近年は（輸出元の指定もあるのでしょうが）原題のカタカナ直しが目立ち、日本語の崩壊、カタカナ文字の氾濫に寄与している面のほうが大きいように見えます。秀れたタイトルは多くの人々の注意を引き、興行収入にも貢献するという映画界にとっての実利もあるはずです。

映画がより多くの人に見られるために、日本語がより豊かになるために、ここに賞を提案した次第です。そのあとは映画のなかみですが、それは作る人たちの腕次第、そちらにお任せしましょう。」

第4回目は、昨年7月から今年6月までに公開された作品が対象で、表彰式は8月28日「GTF トーキョーシネマショー 2008」のなかで行われた。

第4回 「筑紫賞：ゴールデンタイトル・アワード」 授賞式

日 時： 平成20年8月28日（木） 午後4時00分～

受賞作品： 「母べえ」

配 給： 松竹株式会社

選 評： 筑紫 哲也

どんなタイトルがよいタイトルなのか—いろいろな物指しがあるでしょう。すっと頭に入りやすい、リズム感がある、そして何よりも「名は体を表わす」つまり作品と題名とがピッタリと合っている 等々。「名は体を—」と言えば、日本映画になかなかのタイトルが今回は多かったような気がするの、それだけ元気が出てきた証拠なのではないでしょうか。だとすれば、うれしい。

さて、そういうなかで、今年度、邦画の代表作とも言える「母（かあ）べえ」を選ばせていただきました。

「母」を「かあ」と読ませるのは、最初は違和感があるのが、それを越えてしまうと 逆に印象を強める効果を持つ—そういうタイトルの妙を感じさせます。

もちろん、作品の主題、内容とタイトルがピッタリと合っているからこそ、タイトルが生きてくるのですが。

「築地魚河岸三代目」のリズム感、「山のあなた 徳市の恋」「夕風の街 桜の園」の哀切な抒情性、そして最後まで「母（かあ）べえ」との間で迷った「明日への遺言」—魅力的な日本映画が多かったという意味がおわかりでしょう。

2) 「シネマトークショー」

映画『劔岳 点の記』に見る「日本の姿」

今年の筑紫賞を記念して行われたトークショーには、2009年公開予定の「劔岳 点の記」を監督・撮影され終えたばかりの木村大作氏を迎えて、エピソード、苦労話や撮影風景、映像クリップが紹介された。

進行は、当初予定されていた筑紫哲也氏が、授賞式直前に急逝されたことから急遽、襟川クロに担当していただいた。

【司会】 それでは出演者の皆さんをご紹介します。本日、ラインアッププレゼンテーションも大いに盛り上げていただきました、映画パーソナリティの襟川クロさんです。どうぞ、よろしく願いいたします。（拍手）

- 【襟川】 こんにちは。よろしくお願ひいたします。
- 【司会】 そして本日のゲストは日本を代表する名カメラマンであり、来年公開の「剣岳 点の記」では初監督もつとめられた木村大作監督です。どうぞ。
(拍手)
- 【襟川】 これからの日本を代表する名カメラマン木村大作さんが生涯初めて演出も手がけました、という作品を中心に木村大作カメラマン、そして監督の素顔に迫ります。
相当お痩せになりました？
- 【木村】 10キロ痩せましたよ。72キロあるんだけど62キロまで行って、いま3キロぐらい戻ったところですね。今日はいっぱいのお客さまでホッとしています。この映画を理解できる年齢層の方で嬉しいです。
- 【襟川】 え？ それは具体的にどういう意味でしょうか？
- 【木村】 年寄りってこと。(笑) ぼくも69歳ですからね。来年封切るときには70歳です。人生の終末を迎えて命をかけて撮った映画です。これは星野JAPANが金メダルしか要らないと言って4位になっちゃってさ、あまりデカイこと言うとみっともないな、と思ってるんだけど、まあねえ、自分は4位とか3位とかって世界じゃないんでね。多くの人が見てくれることを願っているだけで初日に誰も来てないんじゃないじゃあ星野JAPANと同じになっちゃうなあ、とそれだけはないように皆さんの力をせいっぱい發揮してもらいたいと思ってまーす。(拍手)
- 【襟川】 お願いしますね。と言いつつ来年の公開は6月ですよ？
- 【木村】 6月ですよ。今日東映の岡田さんがいたので・・・6月ですよ？
- 【襟川】 6月までずーっと。でもその前に東映さんの代表する「卑弥呼」がありますから。
- 【木村】 「まぼろしの邪馬台国」は11月ですから。
- 【襟川】 それが大ヒット？
- 【木村】 それを早く観ちゃって、あとは「剣岳 点の記」のそなえてもらいたいと思うのですよ。
- 【襟川】 ところでこの映画をなんで木村さんが自分で企画して、監督して、という流れになったんですか？
- 【木村】 これもまあインテリ風に言うと、ちょっと違うんですな。今日はバラエティ風に言ったほうが面白そうなので、ぼくはカメラマンでずっとやってきているのですが、最近評判が悪くて3年にいっぺんぐらいしか来ないんですよ、話が。最近、監督が先ず様が変わりしちゃったんでね。みんな若くなったってことでプロデューサーの中には木村大作と組ませようということと若手の監督にぼくのでやってくれ、って頼みにいくのだけど全部断られるんですよ。そうすると仕事ないですよ。

それで3年も遊んでいるとやっぱりちょっとオカシクなっちゃうんでね。まだこの映画の世界から離れたくないんですよ。面白い世界ですからね。ですから自分で自分の仕事を考えなきゃならない立場になってきたんです。それがきっかけといえればきっかけで、もうチョイ言うといまの日本映画界にインテリ風に言うと、いまの日本映画界に乾坤一擲の映画を見せつけてやろうという皆さんに見せる前に映画の世界の人に見せつけてやろう、と。本物の映画づくりはこういうことなんだ！ というのをたたきつけてやろうと。今日のテーマは「環境について」なので・・・あのね、ぼくはもう3年やっているのですが、北アルプスにいくと本当にいまの日本の自然は本当にオカシクなってます。6月は梅雨ですよ。いま7月が梅雨ですわ。で、今年の梅雨なんてのはいつもいつもシトシト降ってるんじゃないで、ザーと夜中に降って次の日ピーカンになったりね。なんかムシカリという花があるんですが、ナナカマドに似た花ですよ。それを去年は8月7日に真っ赤になったんですよ。今年もそれを撮ったのですが、カットが気に食わないので、もう一回撮りに行ったんですよ。そしたらまだ小っちゃな蕾なんですよ。それでこれだったらあと2週間くらいかかるな—と言ってこの間、見に行かしたんですよ。そしたら赤くならないで、黒くなってグシヤグシヤになっているんです。そのくらい天候がグジュグジュです。それでわれわれは29、30にもうチョイ上のほうで撮ろうというので場所を変えて撮りに行かなければいけないのですが、そのくらい日本の自然はオカシクなってますよ。それはこういう映画を撮っているとヒシヒシと感じますよ。それと一昨日は10月7日に雪が降ったんです。去年は10月22日に降ったんですよ。で、今年は多分紅葉がダメだろうとっているんです。紅葉しないで茶色になったまま雪になっちゃうだろうというように土地の人はみんな言ってますよ。そのくらい自然というのは人間が破壊しているんですよ。人間が。ぼくらの映画の最大のテーマは「悠久の自然、はかない人生」これ、ちょっとインテリっぽいね。(笑)

【襟川】それはあれでしょ。原作の中のなにかでしょ？

【木村】いやいや、これは新田次郎さんの原作ではないのですが、新田次郎さんの息子さんは藤原正彦さんです。『国家の品格』を書いた方です。その人の本の中に出ているんです。それをいただいたんです。全部了解した上でもらってるんですよ。悠久の自然 はかない人生。いまさっき誰かが行かなければ道は出来ない。あれは皆さんだっけ知っているでしょう？ 魯迅の言葉ですよ。「地上にはもともと道はない。多くの人が歩いた跡に道が出来る」という言葉から誰かが行かなければ道は出来ない、とね。それは結構な哲学的な言葉はこのぼくの雰囲気からは出ないような言葉がいっぱいちりばめられてますよ。皆さんにはわかると思うのです。(笑)

【襟川】 剣岳のロケーションも大変なのですけども、かつて「八甲田山」という作品があったのですよね。新田次郎さんの。そういうところで自然を常に自分の身体に受け入れて撮影してらしたことが、ある種残っていたのですか？

【木村】 いや、そういうことじゃなくてね、映画というのは人の心情、感情といってもいいのですが、自然の詩情（ポエム）で映画は出来るんだ、というのがぼくの言葉なのですよ。いつもそういうものを感じる。銀座のバーとか新宿の薄暗いバーには人生はない、とぼくは思ってますよ。日本人はいま自然に親しむ機会が少なすぎます。昔の日本人は結構、行っていた。皆さんの年代だと結構行っていると思うのですが、いまの若者なんか行きやしないですよ。六本木だ秋葉原だとね。そして刺しっこやってるんだからさ。あれじゃ刺しっこになるんですよ。やはり大自然の真ん中に立ったときにそんな神経は出て来ないです。だからそういう映画をぼくはずーっとやってきたつもりですよ。「八甲田山」ばかりじゃなくね。

【襟川】 突然そういった自然との共存というか、自然の変化というか、環境破壊の現実というのを見て目覚めてしまったのではないですね？前からエコロジストで煙草は吸わない・・・

【木村】 いや、もの凄いですよ。一日100本吸うんですよ。でも山では絶対捨てませんよ。エチケットのこんなデカイの持ってちゃんと入れて持って帰ってきます。立山、剣岳、あの地方はもの凄く環境が整備されているので、ちり紙ひとつ落とせませんよ。われわれは明治40年の話ですから、登山道がいっぱいあるわけですよ。それを映したんでは前人未到の山へ行くわけですから道のない所で撮らなきゃいけない。そのときは環境庁がちゃんと見に来てます。で、ぼくらは登山道から地下足袋に履き替えるのです。それで麦踏みじゃないですけど、そういうもので歩くぶんには自然の植物も大丈夫なのです。それを全員一致してちゃんとやっています。そういう姿を環境庁の人が見ているこんなに神経を使ってやっていただけのだったら是非いい映画にして下さいと激励されたくらいです。

【襟川】 それは合計200日ですか？

【木村】 この3年間で250日ぐらい。ムロド？ってバスで行けるのですよ。その周りに見える山もそれなりの山なんだけれども、その向こうに行っているわけですよ。そこもやっぱり別世界です。そこに250日ぐらい行ってますよ。すでにね。来年封切日には怖いから剣岳の頂上にいようかな、と思ってるんですがね。(笑) みんなが来てくれれば残っているけど、来ないようだったら剣岳の頂上で一人ポツンと考えごととしていて。6月だとまだ雪がありますからね。凍死するのが一番楽なんですね。(笑)

【襟川】 止めてくださいよ！そんな。もうこの声とエネルギーとそしてガツンと日本映画に一個ゲンコツを入れます、みたいな魂みたいなものをいま感じましたよね。

映画を何シーンかご覧いただくのですが、なぜここまで本物の剣岳に登ってなぜモデルになった方たちの役どころを演じるというか、なりきるというか、その方本人が演じてる、というか、そういうものを作り出そうとしたかのこだわり。いまCGとかデジタルとかいっぱいあります。×××セットでもいいし、そういうもの、絶対に許さない？

【木村】 要するにそこに立って撮らないと、厳しい所にしか美しさなんかありませんよ。楽な所になんか美しさはない。女性がハイヒール履くのはなんだった話ですよ。足の線を美しく見せたいから履くんでしょ？それはしんどいですよね。しんどい姿勢にしか美しさは出ないですよ。気を付けたほうがいいですよ。ダラーッとしているときには相手の人になんにも美しさを感じさせない。少なくともキチッとやっていると、あ！この人！と。姿形なんですよ、顔じゃないんだから。そういうもの追い求めているところ、あるね。厳しいところには素晴らしいものがあるんですよ。そこを言っているわけです。9時間歩いてワンカット撮って帰って来るんだからね。俳優さんなんか「歩くのが職業で撮影が休みだ」って言ってますよ。撮影しているときは。そういう映画づくりなんです。それも自然のヒゲのままやりたいので、山でヒゲ剃ってるの、おかしいからね。とくに案内人とか食糧隊は。山岳会は貴族みたいな人が行ってるから剃ってもいいんだけど、順撮り？やっているんですよ。だから最初行くときは全くヒゲないわけですよ。それが40日、50日になったら浅野さんとか香川さんボーボーですよ。だからラストカット撮るときはそういう顔になってます。それを映画だったら俳優さんのスケジュール気にしてさ、付けヒゲとか、そんなもの絶対嫌ですよ。そういうことだけは。ぼくは黒澤見て育ったんですが、黒澤さんもやってませんよ。自然のヒゲでボーボーになるまで。そんなこと言ったら映画が面白くなきゃしょうがないじゃないかと言うかもしれないけれども、そういうものになにかを感じるものですよ、人間というのは。そういう映画なんです、この映画は。話も面白いですよ、自然ばかり相手なんですけど、東京の部分もあります。そっちのほうにはいまや時の人宮崎あおいも出てるしね。浅野さんの奥さんで。役所広司さんも出てるし、どんなキャスティングなのかしているんですか？浅野忠信、香川照之、松田龍平、仲村トオル、役所広司、宮崎あおい、夏八木、井川もろもろ。

【襟川】 そういう方たちに前もって「あなたの役はこういう役ですから、ご自身がちゃんとキャラクターの人物設定をするように」みたいなことを監督としておっしゃったんですか？

【木村】いや、俳優さんには、こういう頼み方をしました。要するにあなたのスケジュールに合わせません、と。日本の俳優は忙しいんだよね。あなたのスケジュールに合わせません、映画のスケジュールに合わせてくれ。200日、2年間にわたって200日スケジュールを下さい。それが嫌だったら今すぐ断れってね。ぼくは本人に会ってその返事は帰るまでに返事しろ。

(笑) 浅野さんにはそう言いましたよ。浅野さんが、いや、ぼくはやりたいんですけど、と言って、それでマネージャーにぼくはそのとき、よくわかってない人なので、本当は指さしちゃいけないんだけど、「どうなんですか？」って言ったら「よろしくお願いします」と。あー、決まったねって言ってね。それで決まったんですよ。だからそういう意味ではそういうようなキャスティング、それで映画のスケジュールに全部合わせてくれました。それじゃなきゃこの映画は出来ないわけですよ。だから一番先に感謝しなきゃいけないのはこの映画に出てくれた山に行ってくれた俳優さんたちには本当に感謝してますよ。まあ、ずーっと話していると止まらないんだ。

【襟川】いろんな自然の厳しさとかに触れたんですけど、ここらへんにメイキングのフィルムをご覧ください。今年の3月に行われたロケなんですけど、明治村の撮影。3月から4月。そのときのメイキング映像をご覧ください。

(上映)

【襟川】皆さん、いつでも大きな荷物しょってますよね。

【木村】あれは昔の強力というか、ボッカ？は150キロしょってたんですよ。信じられないでしょ？150キロ、そういう案内人やるためには80キロぐらいしょわないと。そういう昭和初期の映像が残っているんですよ。そういう姿が。山の稜線を豆粒のように歩いているわけです。そういうものに感動が出来ない人にはべつに観てもらわなくてもいいと思っているんですよ。(笑) いや、ホントに。

【襟川】また、もう。

【木村】ぼくなんか感情移入出来るわけですよ。だからこの映画を観るということはそういう皆さん、結構人生の重い荷物をしょって今になっているんだと思うのですよね。いろいろあったでしょ？ わかりますよ。そういうものは顔に出るんですよ。だからそういうものをしょって歩いて来た人でないとこの映画はなかなか理解できない。渋谷のガングロには見せなくていい、って言ったんですよ。

【襟川】ガングロって3年前ですよ。

【木村】そしたら「木村さん、いま渋谷にはガングロいません」って言うんですよ。ぼくは次の日渋谷に行って見てきましたよ。ガングロはいないけれど、ガングロと同じようなのはいるね。

だからそういう人たちに無理に観ろ、って言ったって、そういう宣伝は絶対にしないでくれ、って。だから今日は本当にいいお客様ですよ。ぼくは自信を持って喋れるから。

【襟川】 このお話をうかがって、この映画を観たい、と思った方、今の時点でどのくらいいらっしゃいますか？

(拍手)

【木村】 それはご都合で上げたんじゃないでしょうね？本心から上げてくれた・・・ぼく、なんぼでも喋るんですよ。こんな映画人はちょっといないんじゃないかと思うくらいね。

【襟川】 普通カメラマンの方って寡黙だったり言葉が少なかったり・・・

【木村】 現場でときどきぼくの調子が悪いときこうやっているときあるんですよ。そうするとスタッフが「木村さん、風邪ひいたんですか？」「いや、風邪ひいてないよ」

また違うスタッフが「木村さん、今日どうしたんですか？」ウルセーッ！って。そういう瞬間もありますけど、それはそれでこういう大きな声あげて叱咤激励するのは結構プレッシャーなんですよ。それで今日もマイク要らないんです。喫茶店で話してもこのくらいの声になっちゃう。(笑) 東映の岡田社長もこのくらいの声なんです。私は若い頃はファミリーレストランで朝まで映画論を喋っていた。それが全部、ファミリーレストラン中に聞こえるんだ。(笑) それだけだったらいけど、人の悪口も平気で言うんだよねえ。(笑) それで仕事がなくなっちゃった。(笑)

【襟川】 自分の言いたいことズバズバ言うってある意味でストレス発散になりますよね。

【木村】 病気は気から、っていうじゃないですか。病気の原因は全部ストレスだと思えますよ。だからぼくはまだ病院へ行ったこと、生まれてからないんですよ。こういうのはポックリいくんですよ。わかってんです。検診もしたことがないです。いま診てもらったら内臓のどこかが悪いです。そんなの聞いたってしょうがないものね。だったら今のままポックリ・・・脳だけはちゃんとしてほしいとは思ってますけどね。

【襟川】 でもいままでカメラマンとしていろんな監督さんとコラボレーションなさってますよね。で、今回の監督にあたって、過去のあの場面のあの撮り方とか、あの監督の演出方法というのがフワッと浮かんできました？

【木村】 ええ。それは特に黒澤さんの。ぼくは黒澤を観て育ったので。それとそういうのを日本人は恥ずかしがるんですよ。日本の監督って。向こうのスピルバークとか、コッポラとかルーカスなんかはみんな黒澤明のあそこをいただいた、とかそういうの平気で言うじゃないですか。それを自分の映画に入れてそれを超えればオリジナリティなんですよ。

そのへんのところがどうもよくわかってないところがあって、みんな勉強してんだから。こんな1億本ぐらい映画って出来上がっていると思うんですよ。世界各国で。その中のいいものは取り入れればいいと思うのですよ。ぼくはスタッフが理解できないと「これは黒澤明のあそこだよ」とか「これは今村昌平のあそこだよ」「この考え方は降旗康男だ」って平気で言いますよ。そのほうがわかりやすいし、そういうものがそういう映画を撮った人を超えればオリジナリティだと思っているからね。それは黒澤明は超えられませんよ。それは超えられない。超えられないけど、それに迫ろうという意志は持ってるよね。ぼくはどっちかということと体育会系だから肉体だけは大丈夫なの。だからそういう山のとんでもない所へ行っちゃうわけですよ。ぼくはスタッフの先頭を歩いているんですよ。撮影するまでは。

【襟川】荷物をしょって？

【木村】荷物をちゃんとしょって。私物だけだけどね。(笑) スタッフは40キロぐらいしょってますよ。それでも剣岳頂上まで普通だったら5時間かかりますよ。ぼくは3時間で行きますよ。ただ撮影して何カットか撮ってヨレヨレになって帰りはいつもビリです。それは一晩寝れば次の日は先頭を歩いています。ただこの映画ね、こういう話していると「大変だったあ、大変だったあ」って話ばかりなんです。昨日も一昨日もこういう話してるんですけど、それは観るほうは関係ないんですよ。大変であろうとなんでであろうと結果がよくなきゃいけないわけですよ。ただ星野JAPANじゃないけど(笑) その結果はぼくは自信あります。(笑) そこで留めときます。ぼくはこの映画の監督やりたくてやっているんじゃないんですよ。「映画つくりたくて」やっているんです。だからいっしょにつくった俳優やスタッフは全部仲間だと思ってます。俳優さんに監督は演出をするということなんです。芝居をこういうふうにするんだ、ぼくは例えば浅野さんに「柴崎芳太郎、それはあなたがピッタリだと思っているんだからあなたのまんまやればいいんだよ」最初は理會出来なかったんですよ、でもあの大自然を前に浅野さんがこう言いましたよ「木村さん、この映画は山ばかり見ている映画ですか？」ってぼくに言ったんです。「それじゃまずいのかよ！」と言った。(笑) その山を見て感じることをそのまま撮っているんですよ。いい顔がいっぱいありますよ。浅野さんはあまりセリフを言いたくない俳優さんなんです。「母べえ」では山田さんに相当やられたみたいだけどもね。ぼくは山田洋次さんとちょっと違うのでね。どっちかといったら自然派ですよ。高倉健さんをずっと撮ってたからね。高倉健さんは立って後ろ姿を1分回しても全然もつ人なんだよね。それでそれを返してアップ撮ってもあの人芝居してるのじゃなくて心でやってるからね。それは人生みたいのを感じるようなお芝居ですよ。

健さんも大体セリフ言いたくないんですよ。大体監督に「このセリフ言いたくないんですけど」って。例えば「駅 STATION」では三上英次という役やってたんですが、それは三上健ですよ。いろんな俳優さんのタイプがいてそれは緒形拳だったらこの役だからこういうふうにとやろうと。それを芝居と称しているわけですよ。でも健さんはそのまま出てきて高倉健で出てきてそのままお芝居するわけですよ。ぼくは芝居じゃないと思ってるわけ。だから浅野さんもそういうところあるんですよ。浅野さんの顔見てるとセリフ言ったとき嫌な顔になっているんですよ。ぼく覗いているからね。カメラがやってるから。それですって行って浅野さんに「そのセリフ、言いたくないの？」って。「いやまあ、ぼくはあのう・・・」とか言うじゃないですか。「言いたくないなら言わなくていいよ」ハイ、テストって言ってね。相手の顔が浅野さんが突然セリフ言わなくなるからさ。ホーホーとか。でもね、それも面白いんだよね。予定外のことになるわけで、そのときの表情はまた自然なんだ。

【襟川】ドキュメンタリーですね、まるで。

【木村】ドキュメンタリーよ。ドキュメンタリーばかりじゃないけどね。

【襟川】そういうところでちゃんとシーンにしてしまうというのは偶然の結果なんでしょうけど。

【木村】大自然撮るときは5秒で天気が変わるわけですよ。アッという間に雪が降ってきたり、アッという間に見えなくなっちゃうわけですよ。いい条件を撮るといことはその瞬間の判断で撮らないともう撮れませんよ。そこが黒澤明と違うんだけどね。黒澤明はそうなるまで何日でも待つ、ということです。「隠し砦の三悪人」のときにぼくは一番ペーパーで18歳で付いたときに御殿場ロケがあった。10日の予定で行ったのが7ヶ月かかったんですよ。(笑) 凄い監督ですよ。会社は何にも言えないの。10日の予定が7ヶ月だもの。ぼくにはそれは出来ないわけですよ。だから全部してもらって、スケジュールなんか関係なくしてもらってそういう瞬間になったときに「ハイ、すみません浅野さん、昨日言ったセリフは変えてこう言って下さい！」とかね。こういう形で撮ってるから、まあ、演出しているとは言えないんだけど大きくは演出してるんだよね。

【襟川】でもなんと言っても、これはある種自然が90%ぐらいですか？

【木村】まあ、そう言うともた身に来なくなっちゃうんだよ。

【襟川】あ、そうか。ここの部分カット！

【木村】風景ばかりの映画じゃあねえ。でもその風景も例えばお山というところに登るわけですよ。朝日を撮りたくて、雪の時期に。大変ですよ。ツルツルでロープ付けて山岳会とかの案内で早朝に登って富士山が見えるんですよ。それも5合目ぐらいまで見えるのです。雲海の向こうに。

それで剣岳、お山のこっちは日本海ですよ。富士山の向こうは太平洋ですよ。日本という国は横は端から端まで見えるのですよ。そういう感覚がみんなにないでしょう？それをなんにも入れないでプロデューサーに見せたら、なんで富士山入ってるの？というわけです。それはこうこうこうなんだ、セリフ入れましたよ。そこへ。「富士のお山がこんなに見える日は珍しいんじゃない」って香川照之が言うわけだ。そうすると浅野さんが「日本海から太平洋まで見えるんですね、凄いですねえ」というセリフを入れた。じゃなきゃわかんないっていうんだから。本当は昔の日本人はそういうことがわかるんだよね。いまの日本人はそのへんをウロウロしてるだけでしょう？だからなかなか実感がないんですよ。でもそのくらいの風景を撮りますよ。だから風景も凄いの。お山神社ってね、立山信仰の神社があるんですよ。そこの人がこれは10年にいっぺんの風景だ、って言ってましたよ。雲海の向こうにこのくらいはいつも見えるんですよ。でも5合目まで見えるなんてことはなかなかないのですよ。そういうこの映画は神が恵んでくれた自然がいっぱいあるんですよ。自然をどうやって撮るかという、待って撮るしかないんです。CGっての誤解しているかもしれないけどあれ描くんですよ。それをじーっと待って何日でもそうなるのを待ってれば、そういうの撮れるんです。それを撮ってきた映画なんですよ、これは。だから仇やおろそかに見ちゃいけないんですよ。(笑) いや、ホントに。だからさっきも役所さんとか東京の部分もあるし、要するに陸軍参謀本部が日本山岳会というのは明治38年に出来てそっちが先に登ろうとしたわけですよ。小島烏水とって貴族みたいな人がね。日本の山って大体測量部が頂上に行っているんですよ。負けちゃいけない、って浅野忠信が無理矢理行かされるのですよ。そういうつばぜり合いの話と、宮崎あおいさんね、それ浅野さんの奥さんです。これはやっぱり凄いですね。可愛いし。(笑) それでいろいろ批判はあるかもしれないですが、その奥さん像はぼくの憧れの奥さん像にしています。どういうことかという、旦那が一回出発したら半年帰って来ないんですよ。山なんかに行ったら。それをニコニコして「行ってらっしゃい」という奥さんをやってもらった。「アンタ、いつ帰ってくるのよッ！」(笑) そういう奥さんは自分の経験で十分だと思ってるわけ。(笑) だからいつもニコニコ、本心から「あなたのお帰りをお待ちしてます。あなたに心配をかけません」もう全く同じ思いの二人にしたのですよね。それを宮崎あおいさんが的確に・一応宮崎さんには言いに行くんですけれども。「こういう感じでどうでしょうか」って。宮崎さんにはそういう言葉づかいですね。(笑)

【襟川】 なんで変わるんですか？

【木村】女性だもんね。それと可愛いつての大きいよね。(笑) そうすると宮崎さんがニコツとするわけですよ。でも一応監督だからぼくのことじーっと見るんですよ。そうするとドキドキしちゃうの。(笑) 23歳の女性にじーっと見られたらドキドキしちゃいますよ。だからそういう形でいい奥さん像をやってくれたと。楽しみにして下さい。NHKと違う宮崎あおいが見れると思うのです。

【襟川】いままで大人の女性とコラボレーションが多かったですよね。

【木村】吉永さんとか岩下さんとか十朱さんとか、富司純子さんとか、日本の大女優といわれる人とはずいぶんやっています。その人たちとは年齢も近いから友達みたいな言い方できるけどね。ただ吉永小百合さんにはそういうふうにならない。「吉永さん、こうしていただけますか？」って言うんです。(笑) 志麻さんだと「志麻さん、こうやってよー」って言うんです。志麻さんていうのは、やっぱりそういうキャラクターなんです。男っぽいね。やっぱり十朱さんだったら、「なにやってんのよー」と言えちゃうんですよ。その典型は高倉健なんで、ぼくは「八甲田山」以来35年ぐらいになるけどいまだに健さんの前に行ったら「気を付け」です。(笑) いや、ホントに。日本映画界の中で「気を付け」する人は高倉健さんと岡田裕介さんだけです。(笑) いや、ホントに。あとはチャンチャラオカシイよ、って感じなんだよ。(笑) だからそういうぼくですらそうなる人というのは女優では吉永小百合さん、男優では高倉健さん、そういうところに落ちつきますね。これは人間が持っているオーラなんです。なにをいいこと言ったとか、ああとかということじゃなくて、何かかもし出す雰囲気ってあるじゃないですか。だからそういうものに人間ってこうなるんですよ。どうせぼくにはそういうオーラは出ないからこのまま死のうと思ってる、言っぱなしで。(笑)

【襟川】でもご本人は気が付かないと思いますけど、回りには木村大作さんとトークをするとか、お話を聞くとかインタビューするとか、そう簡単に行こう、というタイプじゃないですよ、きっと。うわさに聞くと。私だって今日寝られなかったんですもの。

【木村】なーにを言ってる。(笑) この人とも30年ぐらいの付き合いだからね。

【襟川】30年?!

【木村】そうだろう?

【襟川】30年になりますか?

【木村】25年ぐらいか?

【襟川】ラジオ番組で。

【木村】ラジオの番組に出たのですよ、ディスクジョッキーでの。それで1時間半ぐらいか?

- 【襟川】 番組は1時間なのに2時間半も喋っているんですよ。
- 【木村】 その中にコマーシャル入れるときに赤いランプが点くんですよ。それ、おれ見てるんだけど、喋りっぱなし。だから音楽流さないけどバックミュージックになっちゃってね。(笑)
- 【襟川】 全く変わってないです。25年前の木村さんと。ずいぶんお痩せになったし、着るものもおしゃれなスーツで今日はブランドのスーツじゃないですか？
- 【木村】 パパスですよ。おれ、パパスは嫌いなんだけどね。こういう席だからね。今日本当は筑紫哲也さんと会わなきゃいけないからさ。日本のインテリと会うときにね。いつもの格好じゃまずいな、と思ってちょっとあつらえたんですけどね。あつらえたってパパスだから吊り下げているの。(笑)
- 【襟川】 生まれて初めて見ました、スーツは。
- 【木村】 スーツは着ませんよ。だから今日クロちゃんだからこういう話し方。筑紫さんの相手だったら・・・
- 【襟川】 違うと思う。
- 【木村】 絶対違いますよ。山田洋次風にちょっと考えて言えばいいんでしょう？
- 【襟川】 ならない、ならない、どこに行っても同じです、木村さんは誰でもいっしょ。
- 【木村】 筑紫さんは日本のおめえ・・・
- 【襟川】 (笑) いま、おめえって言ったでしょ？地が出てしまっておりますよ。このへんでもう一回メイキングの映画を観ましょうか。4月のロケなんですけど。
- 【木村】 4月というのは春なんですけど、山の上は雪ってことね。11メートル積もってますよ。吹雪もあるという、完全な冬です。
- (上映)
- 【襟川】 どこでも怒鳴ってますね、木村さん、相変わらず、ガーッと。
- 【木村】 今回はそんなに怒鳴ってないよ。
- 【襟川】 ちなみにいままで苦行みたいなものだった。楽しいという瞬間はどういうときなのですか？
- 【木村】 「今」ですね、撮影が終わったから、夢のような気持ちですよ。この企画は本当は日本映画界は取り上げませんよ。真面目な話だし、品格ある話ですよ。いまどきの日本映画、観てみなさいよ。なんだかよくわからないのチョコチョコチョコチョコ。それが当たるんだよね。もうなにかよくわからないのが当たるんですよ。だからぼくは皆さんに期待したのは日本の映画の観客のレベルを上げてほしいんですよ。皆さんだったらそれわかると思うんだけど。なんかさ、この映画が当たらないと日本の映画は奈落の底へ行くと思うな。(笑)

だってチョロチョロッとした企画でさ、時流に合ったものピューピューとやってさ、それで当たった、当たったって言うのね。本当の映画づくりやってない。またこんなこと言うから日本映画界から総スカンをくうんだけどね。いろんな映画があるということでぼくらは本当の映画づくりをやったということだな。

北島康介ね、今度のオリンピックで有言実行ですよ。凄いと思う。去年の国際大会で肉離れを起こしているのに1着になった大会があるんですよ。そこへインタビューが行って肉離れを起こしてよく金メダルが取れましたね、と言ったら北島康介こう答えたのです。「無理をしなければ金メダルなんか取れない」と言ったんです。ぼくそれね、凄いな、いいなあと思う。これは撮影ではない行だ、苦行なんだ、と。「無理をしなければこの映画は撮れない」と言ったんですよ。その通りになっちゃったけどね。無理をしなければ絶対に撮れませんよ。無理をする、ということは人生において皆さんも経験していると思うんですよ。1回や2回は。ぼくなんか10回や20回してるけどね。だからそういうえいがなんですよ。楽（らく）して撮ってない、ということなんだな。

【襟川】 もちろん俳優さんもスタッフも込みですよ。

【木村】 俳優が一番きつい思いしたんじゃないの。だって俳優は明日なにをするかわからないで毎日いるんだもの。

【襟川】 そうですよ。

【木村】 だって天気次第だしさ。

【襟川】 何時間も登ってワンシーン。

【木村】 ワンシーンではなくワンカットですよ。9時間歩いて池の平という所へ行ったんですよ。車で室堂から5時間。小屋があるんですよ。そこから9時間、それでワンカット撮って帰って来たんですよ。そのときは浅野忠信さんと香川照之さんの二人しか出てないんだけど、去年の秋なんです。これではなにをしているんだ？と。要するに歩き出して6時間後に、ただ歩いているだけじゃねえか、と。これではなんのためにここに来ているんだ？と。ただ一回も仕事してないって大笑いになりましたけど。そういう仕事をさかんにアタックしてくるといって俳優さんは日本にまだいる、ということです。「八甲田山」のときは高倉健さんと北大路欣也さんがそういう状態だったんですけど、そういう俳優さんがいる限り日本映画はまだ大丈夫だと思ってますけど。

【襟川】 うーん、春と秋と色々な季節にロケをやってらしたんですけど、危険なこととか事故とかがどうしても付いて回りますよね。雪だったり・・・そういう目には？

【木村】 そういう大きな事故が一回あったわけですよ。録音の斉藤禎一とぼくと、もう50年付き合ってる人間なんです。そのとき66歳だったんです。いろいろあってそいつに富山だけでいいから最後の清音だけやってくれ、って頼んで、そいつも仕事人間でね。もうチョイ大丈夫だよ、ってある所まで行ってもっと奥まで行きたいって言うわけですよ。そこに仕事があるからね。どんどん奥に行って毎日のようにそいつには神経使って、お前は今日来るな、とか言うわけですよ。おれんとこ来てね「大ちゃん連れてってよ」と言う。いや、お前は無理だよ。「だって大ちゃんだって行くんじゃないか」おれは強いから行くんだ、お前は弱いんだから駄目だ、というわけですよ。そうするとプーとむくれるわけですよ。50年も付き合ってる奴だから。おれは一回怒ったんです。お前の誇りのためにこの映画撮ってるんじゃない、と。無理だと思ったら連れて行かないんだよ、と。「でも言ったじゃないか、無理しなきゃ撮れない、って」(笑)それはね、そういう無理じゃねえんだよ、って。こんこんと言ひ聞かせたんだけど、これは全くの自然災害なんだけど、でもその場所を選んだのはおれなんだ。小屋の裏で、本当は南壁という所で撮らなきゃいけないんだけど、そこはあまりに凄すぎるので俳優さんも大変なので、劔沢小屋の裏でちょっと行った所で、そこだけはごまかそうと思った。危ないので。そこで全く安全だと思ったところに落石があった。録音だから機械だけ置いて耳やっちゃうんで聞こえないわけですよ。そこへ1千万回に一回ぐらいの落石がその一点にいつちやっただ。それで大きな事故になったんですが、いまどんどん回復に向かって9月には東京に帰って来るということで、いずれにしてもそういう事故にあった。ぼくはこの映画を事故があったら中止する、ってやったんですよ。その事故が起きたので8割がた撮ってるんだけど、おっぽっちゃおうと思ったんですよ。止めちゃうと。でもスタッフ、キャストそれと斉藤禎一も、家族が木村さんはそういうことでこれをおっぼるかもしれない、と。家族は息子と奥さんと弟が「木村さん、この映画を最後までやってください、絶対に止めないで下さい。斉藤禎一もそれを願っているはずだ」ってそのときは山小屋で降涙しましたよ。それと俳優、スタッフがみんなぼくを支えてくれたというか、最後まで妥協しないで頑張ってもらいたい、という声に助けられて、10日間だけ中断して、その後再開してそれから神が恵んでくれた天気につきまくったんですよ。それで予定より早く終わっちゃったんです。それでまたセリフが変わったんです。宇治長次郎が柴崎芳太郎に、いつも止め役ですよ。「危ないから止めなさい」と。それがあつた場所で宇治長次郎が「柴崎さん、山には危険が付き物です。無理をしても行きましよう」って映画の中で言わせたの。それが映画づくりと測量隊の新田さんの原作とが全くシンクロしてきちゃったんですよ。

それでもう映画づくりなのか、測量しているのかわからなくなっちゃった。そのくらい、こんな映画ないと思いますよ。

【襟川】 お互いに溶けちゃったんですね。

【木村】 溶けちゃった。それで最後はラストシーンですよ。それは全俳優に向かって「今日はテストもなんにもしない。ぶっつけ本番でいく」と。セリフのあるシーンなんですけどね。それはこの映画に参加して、その映画の中で皆さんいろんなこと経験し思ったろう、柴崎芳太郎の測量隊も同じだ、と。だから皆さん個人の感情でやってください、ってね。「用意、スタート」って。みんないい顔してたよ。ある奴は涙を流している奴もいるし、ある奴はシーンと見ている奴もいるし、だからもの凄い個性が出てますよ。普通じゃそういうところは「皆さん、泣いて下さい」ですよ。目薬さして泣いて下さい、そんなことしたってお客様はごまかせないよね。だから上映人というのは泣く映画大好きなんです。泣く映画が。ぼくはこの映画では泣くところはないと思いますよ。でも誇りと感動は必ずよみがえってくると思う。大体ね。古今の名作で泣きの映画なんてないですよ。「七人の侍」「アラビアのロレンス」。大体日本映画の一番悪いのは誰かが死ぬんですよ。映画の中で。誰かが病気になるんですよ。そんな映画ばかりでしょ。泣け、泣け、泣け、泣け言うんですよ。それを皆さん、音楽でごまかされてみんな泣いてテレビスポットで「泣けました」ってね。なんでそんなにみんな泣きたがるんだろう。そんなに泣きたいならぼくんとこ来なさいよ。いくらでも泣かせてあげるよ。(笑)

【襟川】 でも泣きツボって人によって違うじゃないですか。

お話離れますけど木村さんは犬の映画とか動物映画で泣く人多いじゃないですか。「南極物語」とかでもそうなんですけど、そういうところで泣いたりしないんですか？

【木村】 そういうのは泣きませんね。ぼくはね、今までお袋が死んだときは降涙したけどね、親父が死んだときはなにも感じなかったね。そのくらいですよ、お母さんというのはやっぱり大切なのですよ。だから南極に行ったことがあるんです。パラダイスベイそこへ立ったとき涙が出てきた。それからもう一回はペルーのマチュピチュ、インカがこんながけの上に2000年前にあれだけのもの作っているわけだ、そしていつの間にかいなくなった。あそこの前に立ったときに2000年前に人間はこんなものを作ったんだと涙が出てきたんです。そして3回目が下見に去年、一昨年、先一昨年ぐらいに一人で剣岳に行ったわけですよ。ああ、一人じゃない、もう一人いたな。でも、そのとき一人であることのほうが多かった。それで別山という所から剣岳が見えるんです、ピターッとね。それは雨模様の日だった。その合間に剣岳が雲足にワーンと。

さっきの夏八木さんが立ってたような雰囲気ですかね。それ見てたらダーツと涙が出てきて、そのときはこの映画やる、やらない決まっていたんですが、「これは絶対やるべきだ」と思ったんですよね。だから人生のお別れにぜひこの映画観て下さいよ。(笑)

【襟川】 なにをおっしゃってますか！でもあれですよ。映画の撮影は終了というか一段落してますよね。監督としては、まだやらなきゃならないことがいっぱいあるわけですね。

【木村】 いま編集している最中です。

【襟川】 どのくらい回したのですか、結局？

【木村】 ぼくはたいして回さない。バカな監督が40万だ、50万だって回している人もいるけど。おれは今度のは13万くらいかな。だからもの凄く少ないですよ。全部一発OKだもの。そんな雪の中で足跡作るのね。「八甲田山」という映画もそうなんだけど、NGでもう一回！なんてやってたら、3年か4年かかるよ。だからこんこんと言い聞かせて「一発だぞ」って言ってやっていますよ。だからそんなに回ってない。

【襟川】 そうですか。それを編集するの楽じゃないですか？

【木村】 それはいろいろエライ人がいるんだよ。思想が違うんだよね。こうするべきだ、ああするべきだって。あるときぼくがその人に「大人になれ」って言われてぼくは一応大人になったつもりでいたんだけど、東京に帰って来てからその人に宣言したのは「今日から子供になる」って言ったんです。(笑) だから言うことはきかないということですね。なにか言われたら、ぼくの得意なやつなんです。「嫌だ〜」ってね。そうやって通り過ぎちゃおうかな、と思って。でもこれは観る人が判断するわけだからぼくはそこに期待してますよ。映画界の岡田裕介さんはわかってきているけど、ほかのエライ人がわかってくれないところがあるのでね。それは無視しようかな、と。

【襟川】 いまさっきチラッとお話が出ましたけど、撮影のクライマックス、6月、7月の撮影のシーンなんですけど、そのメイキング映像をご覧いただきましょうか。最後に7分間の特別映像がありますから。

(上映)

【襟川】 このメイキングを作っているスタッフの・・・

【木村】 担当者の大沢っての今日、来てるよ。

【襟川】 その方だってこちらから撮ってるわけですか？

【木村】 そいつは一人でやっているんだよ、ビデオだからね。われわれは35ミリのフィルムでやってるからちょっとそばに行かないけど。

【襟川】 ご苦労さまでしたね。これ大事な記録ですよ。映画とリンクしていくという・・・

【木村】 そうだね。

【襟川】 実際にスタッフたちはカメラ持ったりさっき40キロの荷物を持ってという話がありましたが、どうやって運ぶのですか？

【木村】 リュックに入れたり、カメラなんかはいつでもスッと撮影できる状態に背負えるように、そういうもの作って背負ってますよ。だから最初は例えば撮影の助手で中村というちょっと足の短い人がいるんですが、そいつは太り気味で去年の秋ぐらいはもうヘトヘトになってぼくはいつも帰りは最後だというけれどそれはもう一つはスタッフを見ているわけですよ。どいつが駄目でどいつが最後までいけるか、見ているわけですよ。そういう意味では情がないからね。だからそいつがもうどうしようもないわけですよ。だから山小屋の玄関口で倒れて男泣きしてましたよ。ぼくがつれなく「お前はもう駄目だ、次から連れて来ないぞ」って。ワアワア泣いてるわけですよ。それが次の日も同じようなコースだったので「もう一回アタックさせてください」って。いまはいつもぼくの後ろをカメラしょって歩いてますよ。強くなってます。

ぼくはさっき69歳と言ったけど69歳になっても身体って鍛えられるんですね。三浦雄一郎はもっと凄いけれど、でもぼくはサプリメントを飲んでませんよ。(笑) サンマの開きぐらいしか食ってないけど。だんだん強くなりますよ。皆さんもがっかりしないで山へ行きゃいいんですよ、山へ。そうするとどんどん強くなる。いまは本当にさっきも言ったけど剣岳、普通だったら5時間かかるのに、3時間で行っちゃうんですよ。

【襟川】 3000メートルに登るということは心の準備もそうですけど、身体を鍛えなきゃいけない。高所恐怖症とかも駄目だし、心臓の弱い人もチェックしなきゃいけないし、いろいろやらなきゃならないことがあって全然そういうことは心配なかったんですか？

【木村】 そりゃ心配ですよ。最後まで撮りきれんかどうかが一番のプレッシャーだったですよ。だからよく言ってましたよ。撮りきれたら凄い映画になる、と。ついこの間やっと撮りきれたからホッとしてますが、最後の最後まで撮りきれん自信がこのぼくですらなかったですよ。またもう一つ、ぼくが倒れたら非常に困る状態なので、自分の身体のケアだけはもの凄く考えてましたね。

【襟川】 例えばどんなふうに？

【木村】 あんまり物を食べないということ。これは不思議なんだけど、ぼくは仕事があると大体ご飯食べないんですよ。ピーナッツが大好きなんですけど、それとチョコレートね。それさえ食ってれば大丈夫だと。あとコーヒーですよ。飯とかそういうもの、食わない。どんどん痩せていくでしょう。するともうの凄く身体切れてきますね。軽くなってくるから。

それが秘訣かな、とぼくは思ってるんですよ。若い人はたらふく食ってるけど、あんまり食べるのはよくないんだなあ、と。

【襟川】また上のほうに行くとジャンクなもの食べたくなくなるんじゃないですか、もしかして。

【木村】いや、ぼくは好き嫌いがもの凄く激しいんですよ。

【襟川】本当にわがままなんですよ、食生活が。

【木村】ニンジン絶対食わないしね。トマトも食わないとかね。カレーも山小屋に頼んでニンジンは抜いてもらってます。親子丼みたいのが出るんですが、タマネギが入るじゃないですか。生のタマネギは食うんだけど、煮たら食わないんですよ。それはずーっと人生で決めていることなんでね。(笑) 食ってみたら？という話はないんですよ。だから幼児体験、ぼくは終戦後の人間だから、あのころの一番の好物はコロッケですよ。それとさつまあげとかね。そういうものはいまだに好きなんですけど。牛乳も一切飲まないですからね。脱脂粉乳を飲まされたから、あれで絶対飲まない。だから乳製品は飲まない。チーズも食わないというか、それは食べない、と自分で決めたんですよ。

【襟川】初めから手をつけない。

【木村】つけない。それでパーッと見てあったらそれ食べる。

【襟川】それえらいとか思いませんか？

【木村】ぼくは鯖缶が好きなんですよ。

【襟川】え？鯖の缶詰？

【木村】鯖の水煮が大好きで、それさえあれば大丈夫なんです。(笑) 制作はその鯖缶をいっぱい上げてくれたわけですよ。重いものしょって。でも、山小屋が非常に神経使ってくれて、ぼくに合わせてくれるんですよ。。だから結構食べられるものがあつたので鯖缶が山のように残っちゃった。(笑) 全部山小屋に置いてきちゃった。来年行ったら、鯖缶出してくれ、って言ったら、すぐ出してくれますよ。(笑)

【襟川】結構怒鳴りながらも、俳優さんの面倒みながらも、スタッフの顔色を見たり、いっぱいやることがあつたにもかかわらず、相変わらず食生活は同じですね。

【木村】昔とね。そういう意味では幸せな人生だな、と思いますよ。

【襟川】きょうのテーマは「劔岳 点の記にみる日本の姿」日本の姿をたっぷり拝見しちゃいました。いま、どんなふうに感じていらっしゃいますか、日本の姿を。

【木村】やっぱり容易ならざる事態だとは思ってますよ。これはどうしたらいいんだ、という結論はなかなかね。われわれもどうしていいのか。具体的な、電気をこまめに消せとかいろいろ言ってるけど、なかなかね。

ぼくは最初から点けないからね。うちへ帰って一人で生活してますからね。スタンド一発点けたらそれで終わりですよ。電気代もかからないし、オール外食だしね。ゴミは出ないし、そういう意味では便利なんですけど、そういう状況をどうして変えるって、これは筑紫さんがいればとうとうと喋るんですけど、ぼくには答えがなかなかないんですが、ぼくの出来ることは「いまある日本の自然を撮りつくす」ってことですよね。おれはカメラマンでもあるんだから。それを50年後・・・皆さんはいないですよ。(笑) 100年後、とっくにいないでしょうね。そのときに昔の日本はこうだった、というのは「劔岳 点の記」を観ればよくわかるということになるんじゃないか、と思ってますよ。ぼくは50年後は日本はタイランドになるんじゃないかと思う。南洋と同じふうになると思いますよ。それを食い止めるためには中国、アメリカが京都議定書に参加しないとか、ああいうことやってたんじゃないか。今度は参加するようなこと言ってるけど、ぼくらが一番困るのは実際問題として美しいものを撮りに行こうとすると伐採とか道路が出来ちゃったりとかね。結局それは撮れないという状況ですよ。富士山に行ったことあるらしいけど・・・

【襟川】 完璧に観光名所ですよ。

【木村】 ゴミは捨てっぱなしのさ。あれじゃ、世界遺産なんかにならないよね。

【襟川】 恥ずかしいです。

【木村】 そういうことを各自が気を付けなきゃいけないんだけど、そんなこと言ってるのに煙草を100本吸うんだからね。昭和40年代、50年代、みんな吸ってたよね。ここまで煙草が吸えない世界はなんなんだろう？と。ぼく自身はわかっているけどね。

【襟川】 でも劔岳の上で思いっきり吸ってきたから・・・

【木村】 やっぱり凄いキツイ坂を上がってちょっと休んだときに1本吸う煙草はこれはなんとも言えないよね。

【襟川】 そんな中で監督は最初におっしゃったのですが、この映画の一つのポイントでもあるんですが、「悠久の自然 はかない人生」ということを非常に感じたのですが、監督がおっしゃっている意味というのは簡単にでも具体的にでも結構ですから。

【木村】 藤原正彦さんは「はかなさ」というのは情緒だというわけですよ。では情緒ってなんだ？って。これまた難しいんだけど、ぼくは「はかなさ」というのはそういう大自然の中に人間が歩いているときに感じますね。ポツンと。やっぱり悠久の自然って太古から人間が汚さない限り未来までこの美しい自然は続くのですよ。でも人間たかだか生きて100年でしょう。100まで生きるのも大変なんです。だからある意味では全宇宙的に考えると人間の一生なんて豆粒ですよ。

そういうものを感じることによって、いま自分がどうしなければいけないかということを考えなきゃいけない、ということです。いい言葉があるのですよ。ぼくはこれを高倉健さんからもらった言葉なのですが、ぼくは健さんを神と知っているくらいで、一番尊敬する人なので、その人にももらった言葉があるのですが、「何をしたか、ではなくて、なんのためにするか、が大事だと思います、大ちゃん」という言葉をもらったわけですよ。ぼくもいろんな映画やってるじゃないですか、そうするとそういうこと考えちゃいますよね。なんでもやってりゃいいってことじゃないよ、「なんのためにやるんだ」ということを考えたほうがいいんじゃないかという論しだと思ってね。それからまた仕事の選び方が変わっちゃったものね。そういうことを感じるような言葉が「はかなさ」というふうに思ってるけど。

【襟川】 そうすると木村さんはなんのために「劔岳 点の記」をお作りになったのですか？

【木村】 これはまた言うとも星野 JAPAN になっちゃうんだけど、ぼくはもう本当に人生の終末を迎えているんだから、市川崑や新藤兼人みたいには生きられないと思っているから、それは何か残したい、ということはあるな。そういうこと言うと、そんな映画観に行きたくねえよ、と言われるからね。

【襟川】 そんなこと、誰も言ってませんよ。

【木村】 今日は特別に言ってるだけでね。クロちゃんがそういうふうに仕向けるんだよね。

【襟川】 いや、いや。みんな観たくなりましたよね。これだけいろんなこと言って脅迫してるし。(笑)

【木村】 もっと言えばこの映画はただの一度の監督、っていつてますからね。監督は一回しかやりたくないんですよ。またカメラマンに戻ってらくーに(楽に)仕事したいな、と思ってるけど。

【襟川】 カメラマンのほうがずっと楽ですか？

【木村】 全然、楽。だって軍隊というのは大将がイエス、ノーを決める。作戦というのは参謀が考えるわけ。映画の場合監督が大将で、おれが参謀ですよ。そういう立場でずーっといつてきて、イエス、ノー決める人が全責任を負うわけだから。だからその両方をやってるわけ。参謀と大将を。皆さんは監督というのはずいぶん楽にやっているんだな、と。いまやもうけ主義の監督ばかりが多くなっちゃってね。もうかりゃいいんだ、という。もうかればいい映画というふうに経営者は言うけれども、作っている側もそんなこと言ってるんじゃないんじゃないかと思うんだ。

【襟川】 そのときだけ運用する流行りものの映画がある。これは残る映画だということ？

- 【木村】宣伝部が「唯一無二の映画」ってやってたよね。ぼくはその通りだと思ってますよ。過去にもなかったし、これからは出来ないだろうと思います。だからそれは一生の記念として見たほうがいいんじゃないかと思ってますけどね。
- 【襟川】きっとあと3年後ぐらいのトーキョーシネマショーのとき次の映画「劔岳パート2」・・・
- 【木村】こういうことですよ。ぼくも生活があるんですよ。ぼくは今日霽囲気があってお金持ってそうだけど、本当はお金持ってないんですよ。一銭もね。だから生活するために来年はこれを封切りし、キャンペーンもあるからね。再来年は仕事がないな、と思ってるわけ。大体監督やっちゃったからカメラマンの仕事、来ないですよ。ぼくはカメラマンで使ってくれるのは降旗康男だけです。あの人は大きい人だからね。あとは小っちゃな人ばかりだから。
- 【襟川】そんなこと、ないですよ。
- 【木村】そう思ってますよ。それで再来年のその次の年ぐらいにさ、おれ昔お金に困ってアルバイト探しにいったからね。運転代行業の。だから映画の世界では生きたいんだけど、その前に生活もあるわけだから、まあ、オイシイ話をやってるかもしれないね。
- 【襟川】だからCMでもしかしたらアキバ系の女の子たちとコラボレーションでプロモーションビデオ、作っているかもしれないし・・・
- 【木村】それはないと思うよね。リズム感が全くないから。
- 【襟川】もしかしたら何かが始まるかもしれないし。
- 【木村】そうだねえ、先は誰もわからないんですよ。皆さんもそうでしょ？先のこととはわからない。もう一つ、ぼくの人生訓を言っときますと、道を求めることを諦めたんです。道を求めたって、道なんかみつからないですよ。1億2千万のうち道を求めて最後までいった人なんか100人もいないんじゃないですか。だからぼくは道を求めるのを諦めたんです。「道を求めようと風に吹かれて気の向くままに」という人生でいいと思ってるんです。(拍手)
- 【襟川】素敵ですね。なにかフーテンの寅さんを思い出しました。
- 【木村】その通りだと思います。もう一つ言うと、浅野忠信さんはいつもこの映画が始まる前から色紙に「自由」と書いて「浅野忠信」ってサインしてたんですよ。それをこの映画に入ってからもういつもそうやって書いているんです。浅野さんのいう「自由」ってなんだろうな、としょっちゅう考えるわけですよ。最後に出てきたのは終わる間際なんですけど、浅野さん、ちょっと話がある、って呼んでね。浅野さんがそれをずっと書く。それを言葉にしたらなんなんだろうな、と考えた。それでこういう言葉に行きついたらと。

「なにごとにもとらわれず、なにものも恐れず、心のままに」というのは浅野さんの言っている「自由」かね？って。木村さん、それ面白いですね、って言ったんですよ。じゃあ言ってくれる？って言って映画の中でそれ言っていました。(笑) こんなにいろんなことバラす監督もいないでしょう？でもね、ぼくはみんなに観てもらいたいからなにか面白そうだね、と思っただけのように、こういう話をしているんですよ。映画のそういうセリフというのはそういうときのほうがもの凄いリアリティをもって出てくるものですよ。うちの暗いスタンドの下ではなかなか出て来ないんですよ。だから皆さんもこれからは自然に親しむ。高尾山でもいいんですよ。山へ行く必要ないんです。海でもいいんですよ。もう一つ面白し話。山小屋に行くといろんなアルバイトの女性がいますよ。ぼくはそれをじーっと見ていて、女性は恋に敗れたら山に来るんですよ。男は恋に敗れたら海に行くんですよ。そういうふうに感じましたね。だから今度次にやるとしたら、そういう映画やろうかな、と思ってる。

【襟川】恋に敗れた女が山に登って？

【木村】女の方は恋に敗れるとシンドイ思いしたくなるんですよ。男は恋に敗れると楽な感じになりたいんですよ。そこはやっぱりそういうものを現実に見てますよ。全部、それが当たっているもの。ぼく聞き出すのうまいからね。どういう男とうまく行かなかったの？っての聞き出すのうまいから。(笑)

【襟川】本当にいろいろ幅の広い監督、カメラマン、ということで今日はスペシャルシネマトークということでしょうね。今日は本当に生で本音をバンバン皆様にぶつけてしまいました、ビックリなさらないで下さいね。本当ですから。素顔がこういう感じなので、気合が入ってます。もちろん映画のように。ただふだんから全く同じです。相手によって変えないし、いつでもそのままの木村さん、ということでこれからも愛してあげてください。来年は70歳ですけど大丈夫です。ありがとうございました。(拍手)

【木村】よろしく願いいたします(拍手)今日は非常にいい気持ちで喋ってます。なぜかというと、皆さんの笑顔です。シーンとされたらおれもガックリきちゃうけど、みんなニコニコ聞いていただいたので本当にありがとうございました。(拍手)

【襟川】ありがとうございました。

【司会】木村さんと襟川さん、ありがとうございました。

(一同拍手)

(終了)